

山内弘隆・竹内健蔵 = 著

交通経済学



2002年6月発行
2,000円
有斐閣アルマ
ISBN4-641-12050-1

花岡伸也
HANAOKA, Shinya

(財)運輸政策研究機構運輸政策研究所研究員

交通経済学はミクロ経済学の応用分野の一つであり、これに類するテキストは今までも数多く出版されてきた。しかし、これほど読みやすいものがかつてあっただろうか。これが本書の第一の読後感である。

読みやすい理由は何か。一つは本書の意図する全体像が明確なことである。これは限られたボリュームの中で本書がもっとも気を遣った部分と思われる。1章で交通サービスと規制に関わる現状の諸問題を整理することによって、「交通経済学」という学問分野で学ぶべき最低限の範囲を明確にしている。そして、後の章で各問題について論じる形となっている。もう一つは適切な具体的説明の挿入である。従来の類書で陥りがちであった理論だけの説明から脱却し、ミクロ経済学に基づいた理論の解説を、ある交通サービス(他のサービスの場合もあり)を事例とした具体的な説明で補うことによって読者の理解を容易にしている。ミクロ経済学の基礎を学んでいれば、勉強という意識を持たずしても読める。

本書は全6章で構成されている。1章「市場と政府の関わりとしての交通サービス」に続き、2章「交通需要の分析」では、交通需要の特性と需要構造、分析ツール、そして需要予測に頁が割かれている。これは本書の特徴の一つであり、需要予測や関連するモデルについて丁寧に説明されている。交通に関わる政策分析において需要予測は不可欠な要素であるが、工学系のテキストとは異なり、既存の経済系のテキストではその詳細に触れられていなかった。2章は初学者にとってバランスよく学ぶ貴重な内容であろう。3章「交通サービスの費用分析」では、生産者理論による費用分析について記述されている。最初に費用の概念を整理していることで、それ以後の説明がわかりやすくなっている。4章「規制緩和と運賃・料金設定」と5章「経済理論からみた運賃・料金設定」は本書の核となる部分であり、文字通り運賃と料金設定の各論を論じている。4章で実態面を、5章で経済理論を扱っており、問題点を意識した後に理論を学べるよう工夫さ

れている。最後の6章「交通投資」では、社会資本整備の評価方法として実務レベルでも定着した費用便益分析について解説している。1章から順次追った方が読みやすいが、各章はある程度独立して書かれていることから、どの章から読んでも理解できるようになっている。

今後、本書は交通経済学に関する学部レベルの講義のテキストとして幅広く用いられることは間違いなさであろう。学生にとっては必読書である。しかし、はしがきによると、本書は理論と実務の橋渡しとしての役割も意識しておられる。これは本誌の意図するところとまさに同じである。つまり、政策決定に携わる実務者の方にこそ読んで欲しい一冊だ。交通経済学の入門書とも言える本書は政策立案に寄与するエッセンスが詰まっており、日頃多忙を理由にテキストの類を敬遠している方に向いている。本書は交通機関別、あるいは交通市場別にまとめた各論を述べてはいない。しかし、実務に携わる方々はこれについて十分に把握しておられることと思う。政策分析には、現状の問題認識と理論に立脚した合理的考察が必須であることはいうまでもなく、今まで理論的な考察を避けてきた方にこそ本書を薦める。

近年の規制緩和と実施の影響もあり、航空、バス、タクシー、さらには高速道路の運賃や料金設定に関する話題が熱く議論されている。運賃と料金設定の内容が中心であるのはその点で時宜を得たものと言える。ただ、同じく時宜を得た論点として社会資本「運用」の民営化の議論がある。民営化もミクロ経済学による理論的な考察は可能であるから、これについても触れて欲しかった。

最後に、本書はテキストという性質上仕方ないこともかもしれないが、わかりやすさが売りである反面、ある程度交通経済学を学んだものにとっては物足りない側面もあるだろう。しかしこれを持って本書の価値が下がることはなく、日頃忘れがちな理論からの現状理解を助けるものと思われる。構えずに読まれたい。